

カワハギは養殖新魚種として有望か？

- カワハギの完全養殖を目指して -

養殖研究部 阿部 慎一郎

はじめに

カワハギは、フグ目カワハギ科に属する魚で、その身は白身で、脂肪が少なく歯ごたえがあり、煮付け、刺身、フライ、干物など多種多様に調理される。

旬は秋から冬で、肝臓が特に大きく発達し、こくのある旨みと甘みを有し、身と一緒に刺身や煮付けで食べると非常に美味である。

養殖対象種としてのカワハギには、身は同じフグ目のトラフグに勝るとも劣らないほど美味、時期により、kg 当たり 2,500 円前後の高値がつく、トラフグのように毒を持たない、トラフグでは廃棄される肝臓も美味で食用として利用できる等の利点を有する。

このため、養殖業者からは新たな養殖魚種として、カワハギの要望が強い。しかし、カワハギ養殖には、

種苗生産において孵化仔魚が 2 mm 前後と非常に小さいため、適当な初期餌料が見出されていない、業者間では、カワハギ単一で飼育すると成長が遅いと言われている等の課題があるため、これまでに孵化から産卵までの完全養殖技術は確立されていない。

そこで、カワハギの完全養殖を目指し、採卵、種苗生産および養殖試験を実施したので、その結果について報告する。

試験の概要

- 1 親魚：種苗生産に用いた雌は、上天草市で養殖されたものを購入し、5 ヶ月間、水産研究センターで養成した。また、雄は上天草市で漁獲されたものを購入し、1 週間養成した。
- 2 採卵：底面にアクリル板を敷設した 2 t 水槽に、雌 1 尾、雄 2 尾を収容し、自然産卵で採卵した。アクリル板に付着した卵を観察し、受精を確認した時点で親魚を取り上げ、卵を計数した。
- 3 種苗生産：2 で得られた仔魚で、2 t 水槽を用いて、自然水温で種苗生産試験を行った。初期餌料はカキ卵および幼生を 7 日齢まで与え、その後はワムシ、アルテミア、配合餌料の順で給餌した。
- 4 養殖試験：3 で得られた稚魚 153 尾を 15 t FRP 水槽に収容し、配合餌料を用いて養殖試験を行い、現在継続中である。

結果

採卵数は 15,418 個であった。卵収容 4 日後に孵化を確認し、3 日齢で開口を、6 日齢で摂餌を確認した。40 日齢で 1,289 尾を生産し、平均全長は 21.7 mm であった。また、採卵数に対する生残率は 8.4% であった。

孵化後の生育は順調であったが、配合餌料を給餌し始めた 20 日齢前後から、共食いが見られるようになった。疾病によるへい死は見られなかったことから、配合餌料給餌前後の飼育方法を改善することで、歩留まりを向上させることが可能と考えられた。

また、養殖試験を 11 月 10 日から開始した結果、孵化から半年後の 12 月 12 日には最大で 15.1 cm、150 g に達した。カワハギの出荷サイズは 200 g であることから、カワハギは 1 年での出荷が可能な養殖魚種として有望であると考えられる。



図 1 3日齢

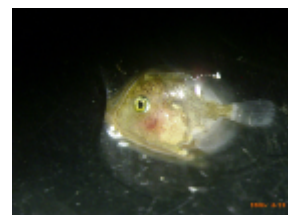


図 2 24日齢

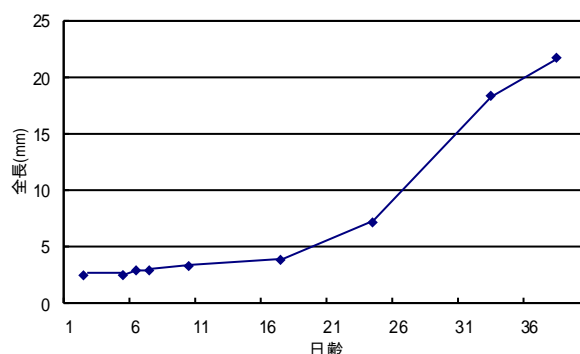


図 3 平均全長の推移

今後の検討課題

良質卵の安定確保技術の確立
共食い及び成長のバラツキ対策
給餌方法の確立